

筑波研究学園都市の建設と周辺住民

遠藤友咲 国松みなみ 齊藤脩 笹木重聖 高山飛勇吾 田村侑介 鳩貝優太

担当教員：松原康介 TA：井尻俊介

1. 動機

我々の班では、「歴史」の観点からつくばについて調べるにあたり、「つくば」の境界に対する住民意識の違いや、その変容に注目した。この問題意識のもととなったのは、筑波山麓地域のことを「筑波」、つくばセンターや大学周辺のことを「学園都市」と呼ぶ人々の存在である。行政的には同じつくば市であっても、心の中には別の境界線を持った人々がいるということである。

人々の心の中の境界線は、研究学園都市からの距離、暮らし始めた時期、時代の変化などによってどのように変容していったのか。こうした「つくば」に対する住民の内面的な部分を、インタビューや伝記的資料のみならず、各地域間の距離といった地理的なデータとも結びつけて明らかにしていく。

2. 目的

「長ぐつと星空」という文献には、研究学園都市建設以前からつくばに住む「旧住民」と、建設後に移転してきた「新住民」の関係についてのエピソードが書かれていた。そこで、我々の班は、旧住民が新住民を受け入れ、「研究学園都市」として成立するまでの過程を明らかにするというを目的とする。

他にも、新旧住民の関係性の変化から、新たに都市を建設するときの文化面についての問題点を探る。

3. 調査手法

文献調査と地域住民へのインタビューを行う。

現段階では、「北条ふれあい館」でインタビューを行った。

4. 文献調査

4.1. 「長ぐつと星空」の文献調査

この文献には、筑波研究学園都市の建設当初から建設が進む過程における住民の生活や心境の変化について、実際につくばに住む住民目線で書かれている。

筑波研究学園都市建設後につくばに引っ越してきた「新住民」の多くは、都市部からの移転者で、「医療、買い物、交通、道路等不便の上なく、住宅から一步出た所から道はまだ舗装されていない」という意見にあるように、建設当初は開発が進んでいない、田舎のつくばに不満を持っていた。

一方で、研究学園都市が建設される以前から筑波に住む「旧住民」は、都市整備・開発が進んでいない土地に新しい都市、しかも国家が立ち上げた学園都市ができることに大きな期待をしており、積極的な誘致活動も行った。しかし、既存の集落や優良な農地を含む土地の全面買収の計画発表後には反対活動が活発に行われた。

建設当初の旧住民と新住民の交流はあまり多くなかったが、住民は数少ない交流を楽しんでいた。

我々の班では、「長ぐつと星空」の文献調査を進めていく上で話題になった、研究学園都市建設における新旧住民の意識の違いや住民同士の交流について、また、時間が経った今の心境はどうなっているのかについて興味を持ち、さらに調査を進めていこうと考えた。

4.2. その他の文献調査

「長ぐつと星空」以外の文献にあたり、得られた情報を以下の表にまとめる。

年	出来事	
1961	研究学園都市の建設を閣議決定	建設期
1963	研究学園都市を筑波に建設することを閣議決定	
1971	研究学園建設にあたっての用地買収がほぼ終了	
1972	竹園地区の公務員宿舎に入居開始	
〃	移転機関第1号である無機材料研究所の業務開始	
1973	筑波大学開学	
1979	施設が概成し、都市の基礎機能や幹線道路がほぼ完成	
1980	当初予定された43機関の移転の完了、研究学園地区の概成	整備期
1981	常磐道 柏-谷田部 間開通	
1985	常磐道が東京と直結	
〃	筑波科学万博の開催	
1987	筑波鉄道廃止	
〃	大穂町・豊里町・谷田部町・桜村が合併し、つくば市発足	
1988	筑波町がつくば市に編入	
1999	新住宅市街地開発や区画整理の終了	発展期
2002	荻崎町がつくば市に編入	
2005	つくばエクスプレス開業	
2006	圏央道 つくば牛久-阿見東 間開通	

筑波研究学園都市の形成される過程は、「建設期」「整備期」「発展期」の3つの時期に分けることができる。

「建設期」は、1961年に学園都市の建設が閣議決定されたときから1980年に学園地区が概成するまでの時期を指す。「長ぐつと星空」の文献に書かれていたエピソードは、この時期のものが多く含まれる。

「整備期」はその後区画整理事業などが終了するまでの時期を指す。この時期には、1985年に筑波科学万博が開かれ、また、87年には、土浦から筑波山の麓を通り、現在の桜川市までを結んでいた筑波鉄道が廃線となった。

「発展期」は、それから現在に至るまでの時期を指す。つくばエクスプレスや圏央道が開通した。

5. インタビュー

北条ふれあい館にて、北条地域の住民にインタビューを行った。インタビューから得られた情報

を以下に記す。

- ・筑波への都市建設が決まったときは、わくわくと不安が半分ずつあった。
- ・北条の商業のピークは昭和30年ごろまでだった。
- ・東大通りの工事による煙がすごかった。
- ・昭和50年頃、竹園や並木にショッピングセンターができ、北条の商業の衰退がはじまった。
- ・鉄筋の建物と畑が入り乱れ、きれいではなかった。
- ・筑波町は合併に反対だった。
- ・最初はハード系の政策が行われたが、年月が経って後から振り返ってみると負の遺産になってしまった。
- ・万博を機に、県南の中心が土浦からつくばに変わった。
- ・仕方がないことだが、新しい地域を重視して北条が無視されていると感じられた。
- ・現在の北条は、高い空き家率と高齢化率が問題になっている。
- ・若い人は北条に住んでも仕事は北条の外、保育園なども外の町へ行っている。
- ・つくばセンターにショッピングに行ったり映画を見に行ったりすることはある。

6. 課題と展望

北条地域でのインタビューを通して、いくつかの改善点が見つかった。インタビューを行うのに適した人数や、事前の記録の準備などについてである。このような点を、次回以降のインタビューの機会に改善していく。

この先、さらにいくつかの地域を対象にインタビューを行い、当時の新旧住民の交流の実態を探る。また、それぞれの地域でのインタビュー結果を比べることで、地域間による住民の意識の差を探る。その地域と学園都市中心部との距離との関係といった地理的な要素も含めながら考察していきたい。

参考文献

- [1] つくばアーカイブズ研究会, “目で見るつくばの歴史,” 3 7 2019. [オンライン]. Available: <https://www.cross.or.jp/pdf/TsukubanoReki-shi/Medemiru-Tsukubanougoki.pdf>. [アクセス日: 14 11 2021].
- [2] 小林秀樹, “筑波研究学園都市 年表,” 3 2015. [オンライン]. Available: <https://www.tsukuba-housing.org/thistory/nenpyo/nenpyo.pdf>. [アクセス日: 14 11 2021].
- [3] 筑波研究学園都市の生活を記録する会, 長ぐつと星空 第一部, 筑波書林, 1981.
- [4] 筑波研究学園都市の生活を記録する会, 長ぐつと星空 第三部, 筑波書林, 1981.
- [5] 筑波研究学園都市の生活を記録する会, 続・長ぐつと星空 上, 筑波書林, 1985.
- [6] 筑波研究学園都市の生活を記録する会, 続・長ぐつと星空 中, 筑波書林, 1985.
- [7] 筑波研究学園都市の生活を記録する会, 続・長ぐつと星空 下, 筑波書林, 1985.
- [8] 久保田治夫, 筑波研究学園都市, 筑波書林, 1981.
- [9] 筑波研究学園都市施設記録写真集刊行委員会, 写真集筑波研究学園都市: 建設の記録, 日本建築学会, 1982.